

ベールを脱ぐ「役員室」 ～新人副会長の怒涛の日々～

弁護士会館6階に位置する「役員室」。そこは、会員の皆様にとって少し縁遠く、ベールに包まれた場所かもしれません。この連載「理事者室から」は、会長や私たち副会長といった理事者が、普段どのような日々を送っているのかをお届けする企画です。

この記事執筆している4月12日現在、私は副会長に就任してまだ数日しか経っていません。今回は、新人の「筆頭副会長」というフレッシュな視点から、このわずかな期間に体験した怒涛の日々や、役員室のリアルな空気感をお伝えしたいと思います。

年間900の議題！

理事者の活動は、就任前の3月からすでに始まっています。前年度の執行部が行う理事者会などの各種会議などを傍聴しました。理事者会は原則として週2回、朝9時30分から2時間半にわたって行われます。当会の諸課題から各委員会からの付議事項まで、年間の議題はなんと約800～900にも上ります。これらの会議を傍聴していなければ、到底太刀打ちできない、そう痛感させられる合理的かつ必須のプロセスでした。さらに、五十嵐裕美前筆頭副会長からは2回にわたり合計2時間の個別引継ぎを受け、バトンをしっかりと受け取りました。

霞が関を駆け抜ける「挨拶回り」

4月1日、小雨が降る中で私たちの業務はスタートしました。その職責の重さを肌で感じるのが、各所への挨拶回りです。最高裁判所をはじめ、東京高裁・地裁・家裁、検事総長、警視總監、そして日弁連や法テラスなど、関係各所を駆け巡りました。

副会長 谷原 誠 (46期)

主な担当業務：総会、常議員会、資格審査、懲戒、綱紀、総務、人事、入退会、司法協議会、男女共同参画、職員人事・労務関係、人権賞、税務等



頼もしき「会務の総合デパート」

今年度の理事者は、石原修会長(39期)を筆頭に、私を含む46期から58期までの副会長6名、そして監事2名という陣容です。役員室では、個室を持つ会長とは異なり、私たち副会長は一つの部屋に机を並べています。会務経験が豊富な他の副会長たちは、次々と的確な判断を下しており、その様子はまさに「会務の総合デパート」。頼もしい限りです。

お弁当会議と、筆頭副会長の重圧

副会長の主な業務は、「会議」「決裁」「職員からの相談対応」の3本柱です。予定がぎっしり詰まり、週に1回はお弁当を食べながらの会議となるほどです。1日に10件以上上がってくる稟議決裁の山を前に、「どこまで深く読み込むべきか」と手探りの状態です。「筆頭副会長」には特有の任務があります。日弁連の業務で多忙を極める会長に代わって役員をまとめる役割(これについては、まだ実感が湧きません)のほか、各種会議の司会進行、懲戒言い渡しの立ち会いなど、気の抜けない業務が待ち受けています。

おわりに：全国の「灯台」となるために

今年度は、2028年に迫る基幹業務システムの大改修に向けた「要件定義」という山場を迎えます。実務を担う当会職員には多大な負荷がかかることが予想されるため、業務過多を防ぎ、働きやすい環境を守ることにも私たち理事者の重要な使命だと考えています。

会員の皆様が各方面で存分に活躍し、当会が全国の単位会を照らす「灯台」となるよう、着実に会務運営に取り組んでまいります。どうか皆様のご理解とご協力を、よろしくお願い申し上げます。